

安楽島

鈴木 光

SC-009



「安楽島」 ある家族の本当の話／他者を理解していくプロセス

ある崩壊した家族に「ヒロシ」という異質な人物が入り込むことで、家族の関係が回復していった… 作者はそのような興味深い「本当の話」を聞き、それを役者に演じてさせて撮影する。シネマ・ヴェリテの手法を意識して制作した本作には、フィクションの力によって他者を理解していくプロセスが記録されている。ドイツ滞在中に制作した短編“Das Strahlen”^{*}を併録。

^{*}ドイツ語「光り輝く／放射線を発する」

鈴木光の作風は、まるでフィクションのように俄かには信じ難い、だが紛うかたなき事実真実を、再現形式も交えた自由で大胆なドキュメンタリー的手法で撮る、というものである。『安楽島』は、その中でも最も成功した、傑作と呼ぶべき作品である。最初にこれを観たときの驚きは忘れられない。コレって本当の話なの？思わず鈴木君に訊いてしまった程だ。勿論、ホントに本当だった。だが、この驚きは事実の力だけによるものではない。鈴木光の視線が、フィクショナルなドキュメントの力を増幅しているのだ。

佐々木敦

批評家



SUZUKI Hikaru 1984年生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科を卒業後、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)に入学。在学中より美術と映画の領域を横断しながらグループ展や映画祭などで精力的に発表。

2012-2015年ドイツ ベルリンに滞在。コンラッドヴォルフ映画大学ヴァーベルスベルクでナラティブな映像表現の研究を行う。また、平成 25 年度ポーラ美術振興財団若手芸術家派遣制度により在外研修員(ベルリン)。シネマ・ヴェリテを今目的に再解釈した「安楽島」は、シネドライブ2012にて、グランプリにあたるシアターセブン賞を受賞した。

撮影行為とアートを結ぶ、映像レーベル ソルコード 第四期リリース



休日映画 2009-2014

斎藤正和

SC-010

「休日映画」 21世紀初頭のメディア技術で綴る家族アルバム

作者は休日に家族を撮影し、それを短編映像として不定期にネット公開している。本作はこれまでの映像群をまとめて一本の映画にしたものだ。第一子誕生の2009年から2014年まで、マスメディアが報道するニュースを盛り込みながら、家族に起こった出来事を多様な撮影手法によって記録している。沖縄旅行の映像をコンピュータに自動編集させた“A Piece of Sunsession #02”を併録。

「休日映画」は断崖に立つ私に希望を持たせてくれた大切な作品となりました。

家族四人の顔がそっくりな齋藤家。

その愛くるしいそっくり家族が穢れ朽ちて行く世俗と折り合いをつけながら休日毎に家族の「営み」として続けている「祭ごと」を「休日映画」とその家族も呼ぶと聞いた。

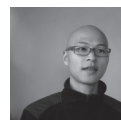
父として作家として齋藤正和が時に過剰な技術を駆使しても尚、家族の生は聖なる姿を失わず、単純なふりに複雑なふりするデジタル技術を凌駕してみせる。聖と俗を結ぶこの家族の「政」、その「政」こそ、メディア原始の姿と信じて疑わない。

本作を契機に多くの家族がそれぞれに個々の「政」を営まれはじめることを願う。俗の底さえ破り抜け落ちた「いま」のメディアと呼ばれるものから、出来るだけ遠くに、見えなくなるまで速くに離れ、原始の姿にもう一度、生まれ変わる為に。

「休日映画」は断崖に立つ私に希望を持たせてくれた大切な作品となりました。

仙頭武則

映画プロデューサー／監督／名古屋学芸大学・教授



SAITO Masakazu 1976年生まれ。主な作品に、コンピュータ自動編集による「Sunsession」シリーズや、岩下徹(ダンサー/舞踏家)とのコラボレーション「動の影」がある。シングル・チャンネルの作品だけでなく、国内外でビデオ・インスタレーションを発表。近年は、舞台表現におけるライブ映像の可能性も追求している。2010年から、家族をモチーフにした「休日映画」シリーズをネット公開。



Now On Sale

リリース作品情報

定価 各 3,800円+税

ライブラリー版 価格 各14,800円+税



SC-004,006,007,008 は英語字幕選択可能

SC-003 は日英字幕併記

Shop Information

取り扱い店舗情報について

DVD は、SOL CHORD ウェブサイトより、オンラインで購入可能です。販売店情報も掲載しています。

<http://solchord.jp>



オン 前田真二郎 sc-001

香港国際映画祭で絶賛された、ジャパニーズ・ニュー・スタイル・シネマ

第24回香港国際映画祭 正式招待作品

若者を取りまく複数の日常を注視する「まなざし」は旅をすることによって、中心のない平行的に紡がれる世界を関係づける。そこでは何も起こらずただ彼らは移動することにより風景に溶け込んでいく。登場人物は誰も言葉を口にしない。同時録音素材とミックスされた音響は、映像と渾然一体となってシークエンスを形成していく。コンピュータを用いた自動編集によるリミックスバージョン 2作品を併録。



静カノ海 上峯敬 sc-002

HandycamとPowerBookによる、32分間のサイレント作品

入院した彼女に会うために北海道を訪れる。そのようなプライベート映像が、極めて身体的なリズムによってモンタージュされた新感覚のサイレント作品。静寂のなかでの視覚体験は、独特の没入感と速度を感じさせる。軍艦島の空気感が印象的な前作、「12/」、家族の残した8mmフィルムをベースに、3DCG、手描きアニメーションなど、さまざまな手法をミクスチャーした "in-" の2作品を併録。



3rd Vol. 2 2 LIGHT HOUSE 真田操 sc-003

チベットからネパールへ 真田操の "ライブパック"

山形国際ドキュメンタリー映画祭2003 アジア千波万波プログラム 正式招待作品

初めて訪れたチベットの地で青年と出会い行動を共にする。そして後半では、ネパールでの活動の拠点 "3rd HOUSE" にて友人と再会する。作者の小さなビデオカメラが、風景や人々とセッションする。その時空は、透明感にあふれた穏やかさに包まれている。北京から中央アジアを彷徨う期間に撮影した素材を、コンピュータを用いた自動編集によってコンポジションされた "Death Fugue" を併録。



7x7 池田泰教 sc-004

カメラと日常と撮影者によるセッション、49日間

撮影は49秒ずつ49日間にわたり行われる。撮影するモチーフは作者の撮影行為を通じて即興的に決定されていく。この49日間は7日ごとに空けられるピアスによって分節され、7週間というみえない反復に沿って撮影は行われると同時に撮影者の耳は週ごとにピアスが増えていく。撮影行為における儀式性に着目し、カメラと日常と撮影者のはざまにある「言葉にならない光景」を封じ込めた映像作品。前作、処女作にあたる「たまふれ ver1.4」を併録。



軌跡映画1 Cyclops 木村悟之 sc-005

「軌跡映画」～数値空間と現実世界と撮影者による即興映画

作者は、ハンディGPSを用いて半径3kmの円周を24時間かけて移動しながら撮影を行っている。極めてストイックなルールのなかで行われたカメラ内編集により、「未知なる風景」に対する身体的反応を、高い純度で記録している。「軌跡映画」とは作者・木村悟之による造語であり、即興映画のニュースタイルである。テクノロジーと身体の関係、独自の手法で軽やかに示してみせている。



松前君の兄弟の神殿の形 1' 大木裕之 sc-006

鬼才・大木裕之による、21世紀のインプロヴィゼーション・シネマ

「神殿の形」をめぐるハード・シンキングの記録。それは、北海道・松前町を中心に展開する。立ち上がる映像は、語り、書き、歌い、移動しながら思考する作者の生なましい身体の運動そのものであり、見るものの意識と重なり合うことで、逆説的にフィクショナルな時空を形成していく。「松前君の兄弟の神殿の形 1+」を併録。



日々 "hibi" 13 full moons 前田真二郎 sc-007

「毎日ワンカット撮影せよ それを繋げて映画を作れ」という声があった。

映像作家・前田真二郎による、1年間にわたるインプロヴァイズド・シネマ。月の運行をベースにした規則に従って、366日間、毎日15秒のカットを撮影する。この作品はカメラ付ノートパソコンによって撮影／編集が行われた。オリジナルバージョンの他に、現代音楽界の鬼才・三輪真弘によるサウンドトラック "Music for 'hibi' 13 full moons" が選択可能。



NEW WORLD WATER 有川滋男 sc-008

高精度な「曖昧さ」／ポスト・セルフ・ドキュメンタリー

部屋の窓から外を眺めて、彼は(または私は)一日を過ごす。これは、彼(または私)についての話でも、彼の(または私の)奇妙な家族や友人の話でもなく、私たちの(または彼らの)隠された多義性そのものについての話である。ビデオカメラの前において、「彼」は「私」としての、「私」は「彼」としての役割を演じることで、わたしたちの生活に沈殿したものをあばこうとする。